

トゥカーラーム・マハーラージの青年時代とサーダナー スワームィ・ヴァースデーヴァーナダによる解説

最も敬愛されているインドの詩聖の一人に、マハーラーシュトラ州で 17 世紀前半に生きたトゥカーラーム・マハーラージがいます。その短い人生の間に、トゥカーラームは神の存在の体験を多くの人々の手に届くものとなりました。そしてその後何世紀にもわたって、彼が残した詩や歌は、教育を受けていない村人も教養ある学者も同様に鼓舞し、励まし続けています。

シッダ・ヨーガの道で私たちがトゥカーラームについて知るようになったのは、ほとんどがグルマーイ・チッドヴィラーサーナンダやバーバ・ムクターナンダがサツツァングやシャクティパート・インテンシヴで歌った彼の敬愛の歌(アバンガ)を通してです。これらの歌は完全に悟りを得た師の体験と教えを伝えるものです。彼は言葉を通して、彼がすべての人の心の中に認める神に、何世紀にもわたって仕え続けています。

彼の母語であり、マハーラーシュトラ州で使われるマラーティー語で書かれたこれらの歌を通して、トゥカーラームは、神の数々の名前を歌うことで自らを高め、人生をそのように送ることで私たちがまた解放を遂げられると、私たちに熱心に勧めました。この偉大なシッダは、全宇宙を内包する微細なブルーパールを体験するように私たちに招いています。彼は私たちに、創造物のあらゆる粒子に含まれている至福を、自分自身のために知りなさいと呼び掛けているのです。

シッダ・ヨーガのグルたちが引用し、歌ったこれらの啓発的で陶然となる歌に加えて、トゥカーラームは私たちのほとんどが知らない他の数多くのアバンガも書きました。それらの歌はトゥ

カーラームの若い頃の人生とサーダナーについて書いたもので、彼が神を探し求めていた最も厳しく困難な時期のものであります。

多くのインドの聖人たちと同じく、トゥカーラームの人生における事実もまた、彼の死後何世紀にもわたって積み上げられた村の物語と絡み合っています。しかしながら幸運なことに、トゥカーラームは自身の体験をアバンガの中に記録していました。マハーラーシュトラ州は 4,600 以上もの彼のアバンガを出版し、それらの多くは英語やその他の言語に翻訳されています。後述のトゥカーラームの青年時代とサーダナーについての物語は、主に彼自身の言葉からまとめたものです。

私がサーダナーを始めたばかりの頃、トゥカーラームの人生で最もストレスが多かった時期の詩の幾つかを読むことは、いかなる困難に直面しようと最後までやり遂げるという私自身の決意を強めるものでした。私は、このような厳しい苦難を体験してもその運命を嘆き悲しむことはなく、それどころか、なお神に手を伸ばし、慰めではなく強さを求めて神に呼び掛けていた人のことを知って勇気づけられました。神は聞く耳を持っていないのかとも思えたそのような時でさえも、トゥカーラームは祈りをささげるその神から顔を背けることはありませんでした。そして、彼の後の詩が証明するように、彼の不屈の努力は彼にとってだけではなく、何世紀にもわたって、私たちを含む他の探究者たちにとっても、見事な果実を生んだのです。

トゥカーラームの青年時代

トゥカーラームは、17世紀初頭にインドのマハーラーシュトラ州の南部にあるデーフという小さな村に生まれました。彼の先祖と両親は熱心なヴァールカリーで、バクティの伝統における献身の宗教運動に身をささげていました。その運動は 13 世紀までさかのぼり、その中にはマハーラーシュトラ州の偉大な詩聖であるニャーネーシュワル、ナムデーヴ、ジャーバーイー、エクナートなどを含む、数多くの人物たちがいます。

ヴァールカリーは、ヴィッタール神(パンダリーナター、あるいはパンドゥランガとしても知られている)を信奉する人々です。ヴィッタール神とは、宇宙の維持者であるヴィシュヌ神の一つの姿です。ヴァールカリーは、神はどこにでも存在し、カーストや地位などにかかわらず、誰もが最高の尊敬に値するという理解を実践します。

ほとんどの農民たちと同じように、トゥカーラームの家族は、その当時のインドの四つのカーストの中でほとんどが労働者から成る最下位のシュードラのカーストに属していました。しかしながら、トゥカーラームの父は大変尊敬されていました。彼は、インドラヤニ川沿いに結構な大きさの農地を所有し、商人としてもかなりの収入がありました。少年の頃のトゥカーラームは、基礎教育を受け、他の村の子どもたちとは違い、読み書きを学びました。

17世紀当時は、とても若い時に結婚するのが慣例で、トゥカーラームはわずか13歳でラクマバイという少女と結婚しました。

数年間は、すべてうまくいっていましたが、その後、トゥカーラームが17歳になると、彼の知る生活が崩壊し始めたのです。父親は病気になり、間もなく他界しました。同じ頃に、家族の長として父の後を継ぐべく仕込まれていたトゥカーラームの兄が妻を亡くしました。その度重なる死に打ちひしがれ、兄は世を捨て放浪のサードゥとなるために家を出ました。

そのため、トゥカーラームは家族と仕事の両方の責任を持つことになりました。それは全く準備をしてこなかった役割でした。日夜それらをまとめるべく働いたにもかかわらず、若いトゥカは資産を失い始めました。彼も資産も疲弊した時、家族の友人たちがわずかばかりの資金を持ち寄り、彼を立ち直らせました。しかしながらその直後に、その地域一帯は2年続きの干ばつに襲われ、ひどい飢饉(ききん)に見舞われました。作物は実らず、家畜も全滅しました。何十万もの人々と同様に、トゥカーラームの一家も餓死に直面しました。彼は母親の最期をみとりまし

た。自分の長男も失いました。そして、最愛の若い妻も、パンが欲しいと叫びながら命を失ったのです。

トゥカーラームが21歳になる頃には、彼は借金で身動きが取れず、混乱、恥辱、そして悲嘆に打ちひしがれていました。彼の人生は破滅してしまっただけです。

トゥカーラームが、両親と先祖が崇拝していた神に助けを求めたのは、その時でした。

夢の中の伝授

孤独の中で慰めを求めて、トゥカーラームは近くの丘に登り、ニャーネーシュワル・マハーラージ、エクナート・マハーラージなどのヴァールカリーの伝統を継承する多くの聖人たちの教えを熟考しました。何世紀も前に生きていたそれらの偉大な魂とは異なり、トゥカーラームには彼を精神の道に目覚めさせ、導いてくれる精神的な仲間や師はいませんでした。にもかかわらず、機が熟した時、素晴らしい出来事が夢の中で起こりました。トゥカーラームは、その夢についてこう記述しています。

私が川に沐浴(もくよく)に行こうとしていた時、

サッドグルが現れた。

私はどのように彼に奉仕すればよいのか分からなかったが、

彼は私の頭に手を置き、祝福を与えた。

彼は彼の系譜のグルたちの名を挙げた――

ラーガヴァ・チャイタンニヤ、ケーシャヴァ・チャイタンニヤ。

そして、自身の名を私に告げた――バーバ・ジ。

彼は、マントラ、「ラーマ・クリシュナ・ハリー」を私に与えた。

それは、マーガの月の明るい半月の

10日目の木曜日だった。

トゥカは言う、この日、私のグルは私を受け入れたのだ。¹

グレゴリオ暦では1月か2月に当たったであろうこの日は、真に重要な日となりました。トゥカーラームの頭に手を置き、神聖なマントラ、「ラーマ・クリシュナ・ハリー」を伝授して、彼の夢の中に現れたサッドグル——再び会うことはなかった人物——は、トゥカーラームの内なる存在を目覚めさせ、従うべき運命にあった道に彼を送り出すこともしたのです。

トゥカーラームは溺れている人が救命ボートをつかむかのように、このマントラを受け取りました。「ラーマ・クリシュナ・ハリー」を何度も何度も繰り返すうちに、大いなるグルの恩恵で生きているそのマントラは、彼をもがき苦しめていた内面に広がる暗黒と混乱の外へと、トゥカーラームを導き始めました。

トゥカーラームの所有地には、遠い昔に廃虚となった古代のヴィッタール神の寺院がありました。しばらくの間マントラを繰り返した後、トゥカーラームはこの寺院を修復しなければならないと感じました。それは、彼の2番目の妻であるジジャバーイーには全く理解できないものでした。彼女は夫が正気を失ってしまったと思い込みました。しかしながらトゥカーラームは、これより他にはないのだと感じて、どうか辛抱してほしいと彼女に懇願しました。彼は神への奉仕として、寺院の再建に駆り立てられていたのです。

トゥカーラームが天職を見つける

トゥカーラームは寺院再建の作業をしている時に、ここでキールタンをすることを思い付きました。キールタンとは、13世紀のニャーネーシュワルの時代からマハーラーシュトラ州で続けられてきたサツァングの一形態で、ニャーネーシュワルは彼自身も有名なキールタンカル、つまりキールタンの指導者でした。キールタンに欠くことのできない要素には、ヴィッタール神にささげるアバングの繰り返しの部分を皆が加わって歌うこと、そして神の名をコール・アンド・レスポンスの形式でチャンティングし、しばしば恍惚(こうこつ)の状態で踊りながら歌われるナー

マサンキールタナがあります。これらの神聖な集いではこれらに加え、物語を通してヴェーダの教えを伝えるヒンディー語の聖典、『シュリーマッド・バーガヴァタム』からの心に響く物語が語られることもあります。

トゥカーラームは、それまで書き上げた詩は、キールタンにはそぐわないと考えていました。そのため、彼はニャーネーシュワルやナムデーヴのアバンガ、そしてカビールの歌を覚え始めました。

トゥカーラームは寺院の修復と掃除を終えるとすぐに、多くのキールタンを開き、そこで覚えた歌を歌い、グルから授けられたマントラをチャンティングしました。すると村人たちがやって来始めました。

トゥカーラームを通して歌が流れ始める

それから間もなく、トゥカーラームはまた夢を見ました。夢の中にはヴィッタール神が現れ、聖人ナムデーヴを伴っていました。ナムデーヴはトゥカーラームより3世紀前に生きていた、偉大なマラーティー語のキールタンカルの一人です。この夢でナムデーヴは、自分が生きている間にヴィッタール神をたたえる膨大な数の詩を書くと言ったが、それはかなえることが不可能な数だったと言いました。そして今、彼は神と共に現れ、トゥカーラームにこの約束を果たすのを手伝ってほしいと頼みました。

この夢の後、トゥカーラームの内側から次々と自然にアバンガが生まれ始めました。これらの歌は自分が作ったのではなく、神が彼を通して歌っているのだと思いました。そこでトゥカーラームは、キールタンでその神の靈感を受けたアバンガを演奏し始める勇気を得ました。そしてどんどんとより多くの人々が、彼が修復した寺院に押し寄せるようになりました。トゥカーラームは、自分はただそれらのアバンガの媒体となっているだけで、これらの歌を自分が作ったのではないと主張し続けましたが、キールタンに参加している村人たちは、トゥカーラームがただ謙遜し

ているだけだと感じていたに違いありません。彼らはトゥカーラームを自分たちの中にいる聖人と見なしていました。

一方、トゥカーラームは自分の神の体験不足をさらに痛感していました。そのせいで、彼のヴィッタール神への詩は、しばしば絶望に満ちていました。

人々は崇拜と尊敬の目で私を見つめている。

彼らは私の心の内を知らない。

おお、パンダリーナター、私は不安でそれを認めることを恥じる。

これらの気高い人々はすべての人を創造主の一形態であると見なし

私の短所を見ない。

トゥカは言う、おお、神よ、あなただけはご存じです

私は何も変わっていないことを。²

トゥカーラームは自分は不十分で不完全であり、欠陥と欲望に満ち、神から遠く離れていると
思い続けたため、絶望に満ちた詩を書くことがかなり長く続きました。彼の歌を聞いた人々は、
彼を通して神のエネルギーが注がれる体験をしたにもかかわらず、歌った後のトゥカーラーム
自身は苦悩し、神の存在を体験させてもらえるようヴィッタール神に懇願したものでした。

転機

トゥカーラームは、ヴィッタールにささげるキールタン —— 人々を神の名の数々を歌うことに導くこと —— を開き続け、神のことを絶えず考え続けました。そうすることで、トゥカーラームは自身のマインドを浄化していたのです。

やがて彼は、ヴィッタール神がダルシャンを拒んでいると思っていたが、実はトゥカーラーム自身が神の存在を体験することから自分を閉ざしていたのだと気づき始めました。自分自身へ

の情けなさや価値がないという思い込み、そしてヴィッタールが自分の前にこう現れてほしいという期待が、神はずっと共にいたことを認識するトゥカーラームの能力を曇らせていたのです。ヴィッタールのビジョンを見たわけではありませんでしたが、トゥカーラームは今、あの伝授のためにバーバ・ジ・チャイタンニヤをトゥカーラームの夢の中に呼び出したのは、確かに神であったことを理解しました。寺院を再建し、そこでキールタンを持つことにトゥカーラームを駆り立てたのは神であり、ナムデーヴと共に夢の中に訪れてトゥカーラーム自身のアバンガを歌うことを鼓舞したのは神だったに違いありません。そして確かに、トゥカーラームを通して歌い、彼に耳を傾けるすべての魂を高揚させたのは神だったのです。

寝ている時、起きている時、夢を見ている時、私はあなたの姿に瞑想する。

今は、私たちがいつか実際に会うかどうかにかかわらず、

私はマインドの中であなたに会っている。

この流れる川のように絶え間ないあなたへの思いは

昼も夜も私の中で続いている。

トゥカは言う、私は内側から偉大な助けを得た。³

権力とのいざこざ

人生における神のこの役割を認識した後、トゥカーラームはさらなる信念を持ってヴィッタール神への奉仕を続けました。さらに多くの人々が彼のキールタンに引き寄せられ、遠くからも彼がアバンガを歌うのを聞き、その素晴らしい存在のもとで神の数々の名をチャンティングするためにやって来ました。マハーラーシュトラ州の一般庶民が貧困と疫病、厳格なカースト制度と、経済的搾取にあえぐ中、トゥカーラームは何千人もの人々の中に希望と勇気を呼び起こしていました。

私は気を引き締め

自分の運命を受け入れる準備はできている。

私はあなたがこの世界という大海を渡るための道を敷いた。

おお、あなた方皆、老いも若きも、
あらゆる男女も、
気高くても世俗的でも、勤勉に働いていてもいなくても、来なさい。
来なさい！ そして何も心配することはない。
聞きなさい！ 解放を遂げたあなたを、解放を切望するあなたを、
呼び寄せるためにドラムが鳴り響く。
私の神はその承認と共に
私をこの世界に送り込んだ。
トゥカは言う、私は神の名のもとにある。⁴

デーフの伝統的なブラーミンたちは、トゥカーラームの増大する人気を憂慮すべきものと注視し始めました。当時は、ブラーミンのカーストに生まれた者のみが 精神的真理を教える権限を与えられ、彼らはそれをヴェーダの言語であるサンスクリット語でのみ教えていました。一介の低いカーストのシュードラが、何千もの 一般の村人たちを、一般言語であるマラーティー語による神についての彼の歌で鼓舞することは、異端の行為であり、ブラーミンの権力への深刻な脅威とも映ったのです。

トゥカーラームの人生におけるあの奇跡の物語が起こったのはその時で、彼はそれを彼自身の歌の中に書いています。ブラーミンたちはトゥカーラームに、インドラヤニ川に彼の詩をすべて投げ込んで廃棄するよう要求しました。トゥカーラームはその命に従いましたが、彼は原稿が川の中に沈んでいくのを見ながら、ヴィッタール神にそれらを守ってくれるよう祈りました。トゥカーラームは川岸にとどまることを決め、祈り、断食し、もしそれらの詩が本物ならば、神自身が助けてくれるだろうと望みを持ちました。

13 日後、町の人々は、トゥカーラームの原稿がそっくりそのまま傷つくことなく、 インドラヤニ川の水面に浮いているのを見たのです。

完結

この奇跡的な出来事の後、トゥカーラームの名は彼以前の偉大なヴァールカリーの伝統を受け継ぐ本物の聖人として、インド中に知れ渡るようになりました。非常に多くの人々が遠くから旅をして彼のキールタンに参加し、そしてトゥカーラームを迫害したブラーミンの何人かも彼の弟子になりました。

トゥカーラーム自身、幾つかの彼のアバンガの中でこの出来事に触れています。しかしながら、彼のアバンガは他にも数多くあり、グルマーイやバーバが私たちに歌ったものもあります。それらはさらなる奇跡、トゥカーラームがヴィッタール神への奉仕をささげる中で彼の存在に起こった変容という奇跡を語るものです。トゥカーラームの長い旅は今こそ完結し、彼の切望はかないました。彼は神との一体性の認識に到達したのです。

バーバ・ムクターナンダがしばしば彼の講話の中で歌い、グルマーイが曲を作り録音したアバンガの一つで、トゥカーラームは明言します。

神は私のものであり、私は神のものである。

私は真実を話している。

神は私のものである。

私の体は神の寺院であり、
内も外も完全に純粹である。

私が神を探し始めた時、
私自身が神になった。

トゥカーラームは言う、私は確かに祝福されている。

今日、私はヴィッタールに会った。⁵



© 2021 SYDA Foundation®. 著作權所有。

1 English rendering © SYDA Foundation®.

2 Ibid.

3 Ibid.

4 Ibid.

5 English rendering © SYDA Foundation®.